

【資料】

瀕死の欧米中心主義（2）

板垣雄三（東京大学・東京経済大学 名誉教授）

サイードとバナールの読み方

思想の自己破産

ここまで、「反テロ戦争」、オバマ大統領、欧米社会の対イスラエル観の今後などを、危機的な欧米中心主義の「自己破産」願望の面から見てきた。しかし、破れかぶれの開きなおり的「反テロ戦争」や新段階の反セム主義（反ユダヤ主義）と見かけ上は反対に、これまでの考え方の間違い・偏向はいさぎよく認め、「転向」の音頭をとるフリしながら、まつとうな批判をすりかえて「無害化」してしまう別働隊もある。これは、「反テロ戦争」の隘路から生じる社会・文化現象だ。思想の換骨奪胎による「自己破産」は、マスメディアや仮想の情報空間を利用して社会の文化状況を支配し、欧米の権威・権益を失うまいとするもの。二〇世紀初め以来、欧米の思想・学術は、過去に欧米がイスラームの近代性から学んだ思想伝統の基盤・要素を〔自覚的でない／自覚したくない／場合が多いとしても〕あらたに見なおし発展させる思考・論理枠組の転換に取り組んできた（真理に忠実であればおのずと、転換は自覚的・内発的な動きとなる）。「思想の自己破産」はこれに紛れこんで、その魂を抜き取ろうとするものもある。

『論語』は、〔器量がないと〕「過ちを文る」（過失は見栄を張ってごまかす）とも、「過ちを改めざる、これを過ちという」（過失を認めないことこそ過失）とも、述べる。瀕死の欧米中心主義は、この二つのあいだを徘徊しつつ、生き残りを策すのだ。

東洋観のゆがみ

パレスチナ人で米国市民、コロンビア大学で比較文学の教授だったエドワード・サイード（一九三五～二〇〇三）が書いた『オリエンタリズム』（邦訳も同じ書名〔今沢紀子訳、板垣雄三・杉田英明監修〕、平凡社ライブラリー、上・下、一九八六年〔原著は一九七八年〕）は、イスラーム敵視のあまり救いがたく歪んだヨーロッパの東洋観をこっぴどく批判する仕事だった。

オリエンタリズム（東洋を熟知・支配しようとするこだわり方・かかわり方）の言説について、サイードの論じ方はこんなふうだ。// ヨーロッパ人は、〔二項対立的に〕「他者」としての「ダメ東洋」を思い描く、これに後進／停滞／退廻／非合理／官能／受動／被浸透／のあらゆるネガティブな表象を押しつけ、東洋にそんな「東洋」になること（オリエント化）を強要しながら、それと正反対の存在として輝かしく力強く誇らしい自分たちを自覚して、ヨーロッパの東洋支配を正当化する、こうした知（ないし認識）の権力化また攻撃性は、じつはヨーロッパのがわの東洋に対する負い目・引け目の感覚の裏がえしであって、ヨーロッパの

「東洋」像には「偉いと思うからバカにする」／「好きだから嫌い」／「こわいのでレイプする」／といった葛藤や倒錯がひそんでいるのだ、と。

変装する非難

この書物が一九七八年に出版されると、たちまち、きびしい批評が湧きあがった。サイードは事実認識を誤っている／彼の視野は英・仏に偏っていて狭い／とりあげる人物が不適切／文学批評が政治論議と化した／ヨーロッパの東洋学者を誤解している／等々。私は私の主張にかなう同志が現れた感じでいたから、^{ひとごと}他人事ならずこうした論難の行く末に注意を払っていた。同書邦訳の監訳者でもあったから、なおさらだ。まもなく確認できたのは、サイードを攻撃する人たちが、とかく枝葉末節に流れて、欧米中心主義の構造欠陥を衝くサイードの議論の本質に斬りこめぬばかりか、いつのまにか〈オリエンタリズム〉という語をサイード的意味あいで使いながらサイードに文句をつけていたことだった。

サイードの仕事は、その間、^{かん}ポストコロニアル（植民地主義に刻印された文化）研究／ジェンダー（性差）研究／サバルタン（^{しげ}虐げられてモノ言わぬ「下層」民）研究／カルチュラル・スタディーズ／等々の新しい視角・方法・意匠が生まれるのに刺激を与えつづけていた。また、[一九七七年から九一年までつとめた]パレスチナ国民議会議員を辞したのちも、米国の対外政策を批評する彼の筆力は鋭さを増し、世界の現実と対峙する批判的知性の存在感をたかめた。そんな彼が米国学術界^{アカデミズム}の権威ある中枢部分から登場したことの意味は重い。彼の音楽活動（評論／イスラエルの音楽家ダニエル・バレンボイムとの協同／）の冴えや、彼に向けられる〔自称パレスチナ人とはウソだといった〕中傷の底の浅さが、どちらも彼の欧米中心主義批判の論理の重厚さを逆に証明する結果になった。まさしく彼はアイデンティティー複合の人だった（サイード〔中野真紀子訳〕『遠い場所の記憶—自伝』、みすず書房、二〇〇一年〔原著は一九九九年〕）。

二〇〇三年サイードが亡くなると、彼の死を悼む声が世界中であがる。ポストコロニアル思想家としての彼への賛辞の渦は、四半世紀まえの雰囲気とまことに対照的だった。だが、彼が心血をそいだパレスチナ問題（サイード〔杉田英明訳〕『パレスチナ問題』、みすず書房、二〇〇四年〔原著は一九七九年〕）における植民地主義の「いま」との格闘は敬遠され、その受け継ぎは流行らない。「旧」宗主国・「旧」植民地の別なくだれもが避けがたく「むかし」の植民地主義の刻印を押されているというポストコロニアル文化状況への関心が独り歩きして、「いま」をたたかう意味をうすめつつ、サイードを埋葬するのだ。

アテナ 女神はアフリカ産

マーティン・バナール（一九三七年生まれ）はケンブリッジ大学出身の英国人。中国政治思想の研究から出発し、米国コーネル大学で教えながら「西洋古典」概念を一刀両断にする研究へとすすんだ。彼の著書『ブラック・アテナ 古代ギリシア文明のアフロ・アジア的ルーツ』第I巻「古代ギリシアの捏造^{ねつぞう} 一七八五～一九八五」（一九八七年刊）は読みやすい本

ではないのに、それは異例の社会的反響を呼びおこした（邦訳も同じ書名〔片岡幸彦監訳〕、新評論、二〇〇七年。なお、第Ⅱ巻の邦訳〔金井和子訳〕『黒いアテナ 古典文明のアフロ・アジア的ルーツⅡ 考古学と文書にみる証拠』上・下、藤原書店、二〇〇四～五年〔原著は一九九一年〕、これには小田実『黒いアテナ』のすすめ 収録。また、第Ⅲ巻「言語学的証拠」原著は二〇〇六年に刊行された）。

この仕事は、古代ギリシアがけっしてヨーロッパの文化的祖先などでなく、エジプト・フェニキア文明の拡張局面=出店^{でみせ}だったのであり、ひろびろとした古代オリエント世界の一角に位置づけられるべきで、むしろそんな古代ギリシア像（「古代モデル」）こそ古代以来の常識だったということを論証しようとする。そして、一九世紀に出現する人種主義的「アーリア・モデル」のあだ花が、進歩／ロマン主義／白人の優越／の観念をあやつって人を騙し歴史を偽造したのを見破り、「修正古代モデル」を構築することが必要だ、と説く。

私は、知りあいのエジプト人社会学者アンワル・アブデルマレク（一九二四年生まれ。サイードの仕事の先駆者）を介して彼の友人バナールの構想を知らされていたから、私の講義を聴いていた学生は、この本が出た直後には「修正古代モデル」の説明ができたはずだ。

もりあがる論争

バナールは主張する。// 神々や地名をはじめ古代ギリシア語には、古代エジプト語や西セム語などアフロ=アジア系言語から来た要素がおおく含まれ、古代ギリシア文明へのエジプトの文化的影響はいちじるしい。それなのに、ギリシア語を一律にインド=ヨーロッパ系言語と決めてかかり、アフリカと結びつく文明の土台をアタマから否定する、そんな「通念」を横行させる学界。これは人種差別の欧米中心主義に毒された学問の退廃だ、と。バナールによるこの「常識」のひっくり返しが、欧米社会で一般読者の興味をかきたてた。

「専門家」たちは門外漢のたわごとと嘲弄^{ちようろう}したり黙殺したりしていたが、本の評判がたかまるごとに、多様な分野の一九人の専門家が共同してバナールを槍玉にあげる『ブラック・アテナ再訪』（一九九六年）を編む。弾劾^あの意味は、バナールが語原学や史料批判の初步的手続きを踏んでいない／神話を歴史にすりかえて黒人のアフリカ郷愁に迎合した政治的作り話をしている／など。「中立」の立場で『大学のなかの異端』（一九九九年）と題する本もできた。バナールは『ブラック・アテナは答えて書く』（二〇〇一年）という反論の大著をだす。一九九〇年代半ばからもりあがった「ブラック・アテナ論争」は、学問の世界からはるか遠くにいる読者まで、ひろく巻きこむものになった。

越境の知の二巨人

マーティン・バナールの師、スコットランド人ジョゼフ・ニーダム（一九〇〇～九五、中国名は李約瑟^{リードエゼル}）は、もともと生化学者。中国語を学び、抗日戦下の重慶で科学顧問。二〇世紀後半をつうじてケンブリッジ大学で「中国の科学と文明」の壮大な研究プロジェクトを指導した。ユネスコ設立に尽力した彼は、レヴィ・ストロースらとともに「人種」を学術用語から除外せよと主張。革命中国との関係強化に奔走し、朝鮮戦争で米国がつかった生物

化学兵器を調査するなどしたので、英國では彼のことを中國顛覆^{ひいき}で政治偏向の学者と酷評する者もいたが、本人は文明研究の本道を歩むと自負してひるまなかつた。

マーティンの父、ジョン・デズモンド・バナール（一九〇一～七一）は、ケンブリッジ大学の物理学者。知の総合をめざし、英國の科学政策に足跡^{そくせき}をのこす。アイルランド生まれのユダヤ人とされた彼は、思想的に共産主義^{コミュニズム}をつらぬいた。科学者運動・平和運動に取り組み、レーニン平和賞を受賞、ジョリオ・キューリーのあとを継いで世界平和評議会の議長となる。科学の社会的役割につよい関心を向け、『歴史における科学』（邦訳〔鎮目恭夫訳〕、みすず書房、一九七四年〔原著は一九五四年〕）をはじめ、「戦争のない世界」や「生命の起源」に関する多数の著作を残した（M・ゴールドスミス〔山崎正勝・奥山修平訳〕『バナールの生涯』、大月書店、一九八五年〔原著は一九八〇年〕）。息子マーティンが知識・学問と政治との関係をつよく意識するのは、この父親と師と、双方からの影響を抜きには説明できない。

古典学者とメディア

母親マーガレット・ガーディナー（一九〇四～二〇〇五）の感化もおおきい。彼女は、反ファシズム知識人サークルに参加し前衛的な詩人・美術家たちと交流するなかで、マーティンを産み育てた。マーガレットの母は、北欧フィンとユダヤ系ハンガリ一人という両親の血を継いでいた。だが、マーガレットの父つまりマーティンの祖父が、著名な古代エジプト学者サー・アラン・ガーディナー（一八七九～一九六三）だったことは、もっと重要だ（『エジプト語文法』（一九二七年、オックスフォード大学出版）とその神聖文字^{ヒエログリフ}一覧は有名）。

マーティン・バナールには、おのずとエジプトに目を向ける素地^{そじ}があったのだ。また彼は、サイラス・ゴードン（一九〇八～二〇〇一）やマイケル・アストウア（一九一六～二〇〇四）ら米国で東欧に根^{ルーツ}をもつユダヤ系考古・言語学者から、「アーリア・モデル」やシオニズム史觀^はを撥ねつける視角（地中海東部沿岸地域とギリシアとを連結する見方）を学んでいた。

ヨーロッパのギリシア古典学がしがみついてきた「専門領域」の縛張り。その権威に挑戦するバナールを素人^{しろうと}・アマチュア扱いした人々は、できあいの学問体系の危機を直感して、わざと「化石」ぶりに徹したのだろう。そうすることで、マスメディアがバナールを持ちあげて「偶像破壊」の爽快感と「謎とき」のスリルとを思いきりたのしんだのち〔眞実は結局わからないという〕「不可知論」に読者を誘導する動きに、重要な脇役として協力していたのだ。

キリスト教とはなにか

古写本群の出土

英國占領下のエジプトで、一八九六年から第一次世界大戦にかけて、オックスフォード大学の学者たちが初期キリスト教関係の写本類の断片（オクシリンコス・パピルスと呼ぶ）を大量に発掘した。第二次世界大戦が終わった一九四五年の暮に、上エジプトのナグウ・ハンマーディーで農夫が偶然掘りだした大きな壺のなかから、やはり初期キリスト教関係のコ

プト語（ギリシア文字で表記されるエジプト語）で書かれたパピルス写本の合冊セットがまとまって見つかる（『ナグ・ハマディー文書』〔荒井献・大貫隆責任編集〕全4冊〔I 救済神話、II福音書、III説教・書簡、IV黙示録〕、岩波書店、一九九七～九八年）。

こんなぐあいで、エジプトを中心にさまざまな文書・断簡がつぎからつぎへと発見された。テクストが解読・校訂され、〔ギリシア語・シリア語・コプト語などの〕原資料・翻訳の相互関係が検討され、〔イラン世界を含む〕地中海世界という舞台をひろく見わたす研究がおこなわれる。そんな国際学界の最先端にいた荒井献（一九三〇年生まれ）とたまたま同じ大学の同僚だったおかげで、私は学術の新局面がひらかれる様子を身近に感じとることができた。

ゆたかな可能性

こうして、一・二世紀から四・五世紀にかけて展開した〈キリスト教〉の、消し去られ忘れ去られていた多面多彩な相貌が、二〇世紀後半をつうじて、しだいにはっきりと浮かびあがってきた。四世紀末に制定される新約聖書「正典」と連関はするが異質の、かつ〔「イエス語録」その他を含む〕種類あまたの、聖なる文書群を読み伝え奉じるキリスト教徒が多様に存在していたのだ（その全体像に近づくための手がかりとして、荒井献『トマスによる福音書』、講談社学術文庫、一九九四年。同『ユダとは誰か 原始キリスト教と『ユダの福音書』の中のユダ』、岩波書店、二〇〇七年）。

問われる正統史観

キリスト教の歴史は、歴史のなかのある時点で「これこそ正統」と決まった立場を基準にして、書かれたり語られたりしてきた（いわば「正統」史観）。当然、ここで疑問がおきてくる。①〔聖書「正典」や「信条」が固まり〕正統的キリスト教が成立するよりまえの時代の〈キリスト教〉について、「正統」の基準をさかのぼって適用し、ハズレたものはすべて最初から「異端」だったと概括してしまうような見方は、適當か。②正統的キリスト教が確立することにより「異端」として排除される部分は、キリスト教にとってかぎりなく「他者」にちかい「外部」、よく言ってせいぜい傍流／落ちこぼれ／欠格者／にすぎないのか。

隠されたまま埋もれつづけた資料群が、やっと陽の目を見て、参照できるようになったのだから、求められるのは、疑問の根源にまでとどく批判のまなざしだろう。そこで……

歴史の罠を脱出

疑問①について起きてきた見方の変化。初期キリスト教が「たたかう相手=異端」の最大勢力と身がまえた影に対しては、「グノーシス派」概念（救済は、身体・物質・宇宙のしがらみから解放されて、〈われこそ神〉と覺悟／覺知することによって得られる、と考えていた一団だとする）をあてはめるのが約束事になっていた。しかし、あらたに見つかった文書群の多面的性格

や当時の信者たちの「読み」の動機と姿勢が研究されるなかで、「グノーシス派」概念は解体しはじめる（たとえば、カレン・L・キング〔山形孝夫・新免貢訳〕『マグダラのマリアによる福音書イエスと最高の女性使徒』、河出書房新社、二〇〇六年〔同書名の原著は二〇〇三年刊〕）。

二～三世紀に「グノーシス派」の「幻」^{まぼろし}と対決しながら「正統派」を自任していた人々が抛りどころとした「原点」は、神の子の「受肉」（肉体をもつ人間イエスの生・死・復活）に力点をおく使徒信条（原型は二世紀後半に成立した古ローマ信条）だったと理解するとしても、その後の展開と見くらべれば、「正統」の基準が移り変わっていくのを認めないわけにいかない。

異端をつくる権力

疑問②について、近年とくに関心がたかまつたのは、キリスト教における「正統性」がローマ帝国の皇帝権力のもとで政治がらみの抗争をつうじて実現・獲得された事実と／これに関連するキリスト教の女性観と／の見なおしだ。

四～五世紀における変化。// コンスタンティヌス大帝（在位三〇六～三三七）は迫害をう�きつてキリスト教を公認（三一三年ミラノ勅令）、テオドシウス帝（在位三七九～三九五）はこれを国教とする（三八〇年。三九一年には異教禁止）。「正統」^み的教会の基本教義である三位一体論（父なる神／子なるイエス・キリスト／聖霊／は 同^{ホモウーシオス}質^{テラソナ}で、一つの神の三つの位格だとする立場）は、ローマ皇帝が召集した公会議の政略・策謀うず巻く場で、「信条」（信仰告白）として決定される。

要約すればこうだ。〔三二五年のニカイア信条から発展した〕ニカイア・コンスタンティノポリス信条（三八一年）は、〔イエスの人性を強調する〕アリウス派を睨い・破門の対象=「異端」とさだめる。カルケドン信条（四五一年）は、〔イエスの母マリアを「神の母」^{アナテマ}と呼ぶのに反対し、イエスの人性を神性と並べて重視する〕ネストリウス派と〔キリストの性質は単一だと主張し、人間イエスを神そのものとする〕単性論派とに対して「異端」としての排除を宣告する。カルケドン公会議は、イエスが「神であって人である」（この場合、神・人両性は混ざらず／変化せず／分離せず／分割されない／）という論理を正統性のモノサシとして確定した。

聖職位階制と女性

これは、〔二〇世紀になって発見された資料群にあふれているような〕思想・靈性のゆたかな発展の可能性をそぎ落とす過程だったのではないか。ニカイアからカルケドンへといたる皇帝主宰の公会議は、宗教面から政治的・社会的な「負け組」・「除け者」をつくりだして排斥し圧迫する「政教一致」の扉を押しあけた。「正統」キリスト教は、傾きかけた帝国権力によって、傾きかけたからこそ、創出されたのだ。

こうして権威主義的な普遍主義が、独善的・排他的に産みだしたのは// 一方に使徒の代表ペトロ=初代ローマ司教の権威（それを継承するローマ教皇が普遍教会の最高牧者として首位権をもつ）にもとづくカトリック教会の序列化／他方にコンスタンティノポリス総主教を世界総主教として戴く東方正教会の系列／。どちらの場合も、その土台には聖職位階制があった（後

者には東ローマ帝国滅亡や民族教会の独立など変遷が見られるが、前者の現在については『カトリック新教会法典〔羅和対訳〕』、有斐閣、一九九二年〔第2巻 教会の位階的構成〕第三三〇～三三四条、参照)。

聖職からの女性締めだしは、女性を抑圧する社会システムを補強する支柱となる。「婦人が教えたり、男の上に立ったりするのを…許しません。…〔アダムはだまされなかつたが〕女(エヴァ)は〔蛇に〕だまされて、罪を犯してしまいました。」「婦人たちは、教会では黙っていなさい。…従う者でありなさい。…知りたいことがあつたら、家で自分の夫に聞きなさい。」(新約聖書テモテへの手紙一2章9～15節。コリントの信徒への手紙一14章33～35節)というパウロの勧告が「制度」化され、社会の^{おきて}擬ともなる。

こうしてみると、このようなキリスト教がやがてイスラームに投げかける非難(神権政治だ、女性抑圧だ、等々)は、「自己憎悪」だというほかはない。

イスラームの登場

正統的キリスト教が「異端」として切り捨て処罰しようとした相手は、〈キリスト教〉が発生した地域(シリア・エジプト・イラン世界などオリエント)のキリスト教徒たちである。〔二〇世紀に出土する〕トマス/フィリポ/マグダラのマリア/エジプト人/ユダ/等々の福音書をかつては読んでいた人たちだ。「グノーシス派」/アリウス派/単性論のコプト教会(五世紀以降はエチオピア教会も)・シリア教会(ヤコブ派)・アルメニア教会(グレゴリ派)・ネストリウス派/ユダヤ教の伝統をかかえたキリスト教徒/らが織りなす世界。ローマやコンスタンティノポリスからの統治に対して反抗する住民たちだった。七世紀以降イスラームが根をおろしていくのは、こんな地域の社会である。

一般にキリスト教といえば、とかくローマ・カトリック教会(ラテン教会)、ギリシア正教会、プロテスタント諸派の教会(つまりは「正統性」を主張する教会)だけ思い浮かべ、キリスト教が確立するときに「鍵」局面となった地域の〔「異端」とされた〕キリスト教は無視してしまう。そしてイスラームは、はるかむかし確立したキリスト教の後塵を拝して登場する遅参の挑戦者とされる。こんなところにも、欧米中心主義はトグロを巻く。

じつは、キリスト教とイスラーム、それぞれの確立への過程を並行・重複した事象として眺めなおさなければならない。むしろ、ほんとうは、両者をひとまとめに眺める視点こそ大事なのだ。

単性論のイスラーム

カルケドン公会議の決定もものかは、問題の地域で単性論の勢力は衰えなかつた(ネストリウス派は、むしろイランから中国までひろく展開する)。頭痛のたねの単性論派対策を議する第二コンスタンティノポリス公会議(五五三年)が開かれるのは、預言者ムハンマドが生まれる十数年まだだ。しかも問題の地域は、東ローマ帝国とササン朝ペルシアとが奪いあう角逐の場となる(クルアーン30章はこの国際情勢にかんする啓示)。シリア・エジプトをササン朝が占領(六一四年)、東ローマが反撃・奪回(六二二～九年)。こんな情勢のまっただなかで、アラビ

ア半島のマディーナでは「単性論」^{くみ}に与するイスラームのウンマ（信徒共同体）が成立（六二二年）。平信徒の市民たちが、王や聖職者のいない国づくりをはじめた。

キリスト単性論が問題にするのは、イエスが神か人かではなく、性質が單一でなければならないということ。アリウス派やネストリウス派も含め、キリスト教徒たちの論争は、それだけで完結はしない。イスラームがそこに介入し、参加するのだから。

重複する二宗教

イスラームは、イエス（クルアーンではイーサー・ブン・マリアム〔マリアの子イエス〕）があくまでも人間であり、預言者の一人だとして、三位一体説を拒否する（クルアーン4章171節、5章72～77節、19章35節、43章57～65節）。イスラームは〔神のアダム創造とともに〕マリアの処女懷胎を信じるが（クルアーン3章42～47節・59節）、〔アダムとエヴァの墮罪はあくまでも彼ら個々人の罪と罰にかかる法的問題であり、それを子孫や人類全体に及ぼしてはならないとして〕「原罪」^{げんざい}を認めないから（クルアーン2章34～40節、7章19～31節）、イエスの贖罪死^{しょくざい}（人間の罪の赦しのため犠牲となる十字架の磔刑死）^{たきい}を否定する（クルアーン4章157節）。「罪といったものは存在しない」（マグダラのマリアによる福音書）という教えとも通じあうところだ。

イスラームは、東方のキリスト教徒たちがイエスの人間性を身近に感じていた感覚を共有したのだ。東ローマ帝国に抵抗していた東方のキリスト教徒たちは、彼らを「啓典の民」と扱うイスラーム教徒の統治を受けられた。政治的にばかりでなく、宗教的にも、連帶が成り立ったからだ。シリア・エジプトはキリスト教「正統」派の支配から「解放」され（六三五～六四二年）、他方ササン朝ペルシアは崩壊して（六四二年）イランのイスラーム化に道がひらかれる。世界の新しい様相が出現した。ヨーロッパの形成も、その一環だったのだ。

イエス像の大衆消費

二〇世紀後半、初期キリスト教についてひらけたあらたな（これもポストコロニアル）眺望は、イスラームという世界的問題の重みをピンと感じる庶民感覚に媒介されつつ、大衆文化に新しいかたちを用意した。キリスト教の伝統的「権威」を疑い、それを手玉にとつて開発されるイエス像の新機軸。それが「娯楽」商品となることに目をつけたビジネスが、大衆動員をかける。マルチメディアの全面展開。広告宣伝はフル回転。

四例だけあげよう。//(1)ギリシアのクレタ島出身の作家・文化人ニコス・カザンザキス（一八八三～一九五七）の小説『キリスト最後のこころみ』（〔児玉操訳〕、恒文社、一九八二年〔原著は『最後の誘惑』（ギリシア語）、一九五一年〕）の大反響は、映画化にすすむ（「キリスト最後の誘惑」、マーティン・スコセッシ監督、一九八八年作品）。//(2)ミュージカル（ロックオペラ）「ジーザス・クリスト・スーパースター」（アンドリュー・ロイド・ウェバー作曲、ティム・ライス台本、一九七一年初演）はレコードアルバム・チャート第1位、ブロードウェーやウェストエンドで驚異的ロングラン。映画化（同名、ノーマン・ジュイソン監督、一九七三年作品）。//(3)オーストラリアの放送製作ドノヴァン・ジョイス（一九一〇～八〇）が書いた物語 *The Jesus Scroll*

(『イエスの巻物』、ロンドン、一九七三年) は、イエスの十字架の死を否定して激論を呼ぶ。／

(4) 神秘主義が好きな編集者マイケル・ベイジエント (一九四八年ニュージーランド生まれ) ほか小説家・TV台本作家の三人チームによる共著『レンヌル=シャトーの謎—イエスの血脉と聖杯伝説』([林和彦訳]、柏書房、一九九七年 [原著は *The Holy Blood and the Holy Grail* [ロンドン、一九八二年]]) は、イエスがマグダラのマリアとのあいだに子をもうけ、フランク王国メロヴィング朝の王統はそこから発した、という説で世間を驚かす。／

こうしたベストセラ一群や記録的大入りは、当然、きびしい反撥・反論をまねく。キリスト教保守派の組織的対抗力を強める結果にもなった。だが、ヴァチカンが禁書にしたり、作家や出版社・劇場が脅迫されたりすれば、それがさらに人気をもりあげる。

ダ・ヴィンチ・コード

一般市民でも手をのばせば、聖書正典からはずされた問題の諸資料を現代語の翻訳テクストとして読むことができる状況が、ひろがりはじめていた。

九・一一のあと、この動きは新局面にはいる。イラク戦争の泥沼化と並行して、米国の推理作家ダン・ブラウン (一九六四年生まれ) のサスペンス作品『ダ・ヴィンチ・コード』が超絶のベストセラーとなる (邦訳は同名で上・下巻、[越前敏弥訳] 角川書店、二〇〇四年 [原著は二〇〇三年])。話題をよんだ映画化 (ロン・ハワード監督、二〇〇六年作品) は、電子媒体化を含め、各種メディアに波及して大成功をおさめる。主人公たちが巻きこまれたスリル満点の暗号解読に立ち会う読者・観客・視聴者は、「キリスト教の命運にかかわる秘密」を隠しつづけてきた教会をとりまく「陰謀・悪逆」の機構 (國家もこれに加担) を、仮想現実であれ読み／観／終えることで、こころに溜まつしこりの排泄・浄化が可能になるというわけ。

『ダ・ヴィンチ・コード』のキリスト教批判に対する反論は、質・量ともにそれ以前をはるかに上回った。だがそれでも、新局面の特徴として、社会的評判のグローバル化空間 (またたく間に各国語の翻訳ができる) には太刀打ちできなかつたし、タテマエと「たのしみ」とは別という大衆文化状況に押しもどされて終わった。

学術的な新知見を一般読者にひきわたす企画にも、有力なスポンサーがつくようになる (たとえば、ナショナル ジオグラフィック協会の国際出版活動。日本語版 [日経ナショナル ジオグラフィック社発行] は、ロドルフ・カッセルほか編著『原典 ユダの福音書』、二〇〇六年／マービン・マイヤーほか著 [藤井留美・村田綾子訳] 『イエスが愛した聖女 マグダラのマリア』、二〇〇六年／など)。

新局面の意味とは

二一世紀初頭のこれらの局面は、[一七・一八世紀啓蒙の時代からフランス革命をへてフォイエルバハ (一八〇四～七二)・ルナン (一八二三～九二)・ニーチェ (一八四四～一九〇〇)・レーニン (一八七〇～一九二四) 等々にいたる多様な思想展開と／森安達也 (一九四一～九四)『神々の力と非力』[平凡社、一九九四年] が描きだした制度変動と／において、ヨーロッパ (近代) を特色づけてきた] キリスト教批判の歴史の単なる続編なのではない。この新局面ではさまざまな含意が拮抗しあってい

る。「反テロ戦争」への反発もあれば、イスラームに触発された宗教嫌悪^{けんお}もある。だが、欧米中心主義が終焉に向かって転げ落ちていく世俗化の坂道で、そこに射^さしこむイスラームの影が気になって仕方がない感覚が、あらゆる場合につきまとうのを見分けるべきだ。

欧米中心主義の保身シナリオ

現実を見すえる話

欧米では、米国覇権のたそがれと欧米中心主義の評判落ちとが実感されるなか、発想をコペルニクス的に転換する／タブーを思いきりこわす／が、標準モードになりはじめた。

有力な二人の政治学者、シカゴ大学のジョン・ミアシャイマー（一九四七年生まれ）とハーヴィード大学ケネディ行政学院のスティーヴン・ウォルト（一九五五年生まれ）の共同論文は、その一例だ（二〇〇六年春、発表直後に「ロンドン・レヴュー・オブ・ブックス」が飛びつき、論争に火がつく）。米・イスラエル関係を根本的に見なおせ、という呼びかけ。イスラエルはいまや米国の戦略的「お荷物」なのに、AIPAC（米・イスラエル公共問題委員会）などイスラエル・ロビーが、米国の対外政策をねじ曲げ、大学内でも「反ユダヤ主義」摘発と称して自由な研究を封殺している、と主張。これが書物になると、影響はさらに拡大する（二人の共著〔副島隆彦訳〕『イスラエル・ロビーとアメリカの外交政策』、講談社、二〇〇七年〔原著は同タイトル、ニューヨークで同年発行〕）。この議論をめぐってオランダの放送局が制作したドキュメンタリー作品（The Israel Lobby, VPRO Backlight 2007）も、ユーチューブ動画サイトをつうじて普及した。

かつて人種差別政策の南アをボイコットしたように、パレスチナ人を無差別に攻撃し殺すイスラエルに対しても同様の措置をとるべきでは？という提案がでてくると、米国のプロテスタンント諸教会の態度はまっ二つに割れる。これを背景に、ジミー・カーター元大統領（一九二四年生まれ、二〇〇二年ノーベル平和賞受賞）があえてイスラエルに向かって「アパルトヘイト」という禁句をつかって物議をかもす動きも起きてきた（〔北丸雄二・中野真紀子訳〕『カーター、パレスチナを語る アパルトヘイトでなく平和を』、晶文社、二〇〇八年〔原著『パレスチナ 平和を／アパルトヘイトでなく／』、ニューヨーク、二〇〇六年〕）。

卒直にものを言う話

米国の経済学者ポール・クルーグマン（一九五三年生まれ。プリンストン大学教授、ニューヨーク・タイムズのコラムニスト）は、人種問題こそ鍵と指摘する。米国をダメにした「保守派ムーヴメント」の手口が人種的不寛容の陰険な利用／公民権のはぐらかし／にあったと、きびしく指摘（〔三上義一訳〕『格差はつくられた 保守派がアメリカを支配し続けるための呆れた戦略』、早川書房、二〇〇八年〔原著は『リベラル派をつらぬく良心』、ニューヨーク、二〇〇七年〕）。彼自身、大統領経済諮問委員会に加わり協力したこともあったレーガン政権から、このやり方が本格化し、少数の富裕層だけがいっそう富む不平等社会への逆戻りが急速にすすんだと告発した。そして、心理的にいまも奴隸制をひきずる米国の「あす」への突破口を、国民皆保険に求める。スウェーデン王立科学アカデミーが彼〔の国際貿易と産業立地の仕事〕への二〇〇

八年ノーベル経済学賞授与を発表したのは、米国大統領選挙の三週間まえだった。

二〇〇八年の年明け、ジョージ・シュルツ（一九二〇年生まれ。八二～八九年国務長官）、ウィリアム・ペリー（一九二七年生まれ。九四～九七年国防長官）、ヘンリー・キッシンジャー（一九二三年生まれ。七三～七七年国務長官）、サム・ナン（一九三八年生まれ。八七～九五年上院軍事委員会委員長）の四人連名の文書「核兵器なき世界にむかって」が発表された。前年秋、過去六代の米政権において安全保障問題の要職にあった人々がスタンフォード大学フーヴァー研究所に集合して、議論しあった結果の合意にもとづく、という。米国の核戦略の理論と政策とを担ってきた中心人物たちが、錦の御旗みはただった「核抑止」の思想は危険だと言いだして、核兵器全廃へのプログラムを提案するようになったのだ。核テロの切迫した危機を強調するにせよ、一同足並みそろえた「変わり身」で世界領導に必勝を期した先手である。これは、オバマ大統領がプラハ演説（〇九年四月）で表明する「核のない世界」をめざす新政策の土台となった。

「発想の転換」の話

〔イスラエル・ロビーともアパルトヘイトとも人種問題とも核とも、そしてユダヤ教から分かれたキリスト教のユダヤ人差別とも、関係する問題として〕『ユダヤ人は、いつ、どのように、発明されたか』というヘブライ語の本が、テルアヴィヴ大学の歴史学（近代史）教授シュロモー・サンド（一九四六年生まれ）によって書かれ、世界中の話題をさらった（二〇〇八年春）。彼によると、聖書の神話と一九世紀以降のシオニズム史観とによって「ユダヤ人」となっている人々は、〔ロシア・東欧や北アフリカ・南欧など〕いろいろの地域で多様なエスニック（民族）集団のなかのユダヤ教改宗者たちの子孫であって、もとからのユダヤ人の子孫は現在のパレスチナ人だ、という。「ユダヤ人国家」言説の土台そのものを根もとからくつがえす議論が、イスラエル社会の内側から突きだされ、しかもイスラエルの読者もそれを競って読む状況が生まれてきた。

【のちに出た手軽で読みやすい文庫版の邦訳は、シュロモー・サンド〔高橋武智・佐々木康之・他訳〕

『ユダヤ人の起源 歴史はどのように創作されたのか』、ちくま学芸文庫、2017年7月（2021年3月追記）】

〔ロシア生まれ、カナダのモントリオール大学で歴史学教授の〕ヤコフ・ラブキン（一九四六年生まれ）は、超正統派ユダヤ教の立場から、シオニズムとイスラエル国家がユダヤ教の本来の立場に反するものだと批判し、世界のユダヤ教徒のあいだでのシオニズム拒否の動きを跡づけた『トーラーの名において—シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』〔フランス語〕（ケベック、二〇〇四年）を著した。その後、この書物は多くの言語に訳され、世界中で注目されるようになった。ここでも、「ユダヤ人国家」神話は揺らぎだしている。

【2009年この原稿を書いたときにはまだ翻訳作業が進行中だったが、その後、日本語訳書が刊行された。ヤコブ・ラブキン〔菅野賢治訳〕『トーラーの名において シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』、平凡社、2010年4月。その後、同じ著者はもっと手軽で読みやすい日本語版を書き、それ

も各国語版になって世界に広まった。読者にはこちらを勧める。ヤコヴ・ラブキン〔菅野賢治訳〕『イスラエルとは何か』、平凡社新書、2012年6月（2021年3月追記）】

歴史の車輪の回し方

世界はいま、常識の「どんでん返し」を待望する時代にはいったようだ。ごく最近まで「单一民族」説がまかりとおっていた日本でも、「アイヌ民族を先住民族とすることを求める国会決議」（二〇〇八年六月）が、衆参両院により満場一致で可決された。あとで述べるが、これは日本国家のあり方・見方をおおきく変えるものだ。

『オリエンタリズム』も、『ブラック・アテナ』も、作品それ自体のもつ迫力はさることながら、社会的人気・評判をもり立てつつ方向づける筋書きがすでにどこかで動いていたようだ。これまで見てきたいろいろの仕事は、個々にはそれぞれ歴史や現実と真剣に対決する誠実な取り組みであっても、出版・放送の業界、ハリウッドの映画産業など、それに大衆自身がおこなう複製・交換も含め、メディアの「評論」機能や「成績評価」機能というフィルターにかかると、思想・表現の予定外の効果を附加されてしまう。ここにつけこんで、欧米中心主義の欺瞞と陷穽／虚偽と罪過／背負いきれない道義的債務／は手ぎわよく認めてしまい、債務をキレイにして口をぬぐおうとする悪意の「自己破産」構想が成り立つのだ。

イエスは、罪びと（人間）の罪の赦しを、借金（負い目）の帳消しの譬えで教えた（マタイによる福音書18章21節以下、ルカによる福音書7章36節以下）。イエスが弟子たちに祈り方の模範として教えた「主の祈り」の一節も、「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人をみな赦しますから」である（マタイによる福音書6章5～14節、ルカによる福音書11章2～4節）。欧米中心主義の「自己破産」構想は、イエスが戒めた「偽善者のようにでなく」に抵触する。

ヴェニスの商人の暗示

借金の三千ダカットを期限に返済できなくなったヴェネチアの貴族アントーニオ。あこぎな高利貸シャイロックは、証文どおり肉一ポンドの返済を、と法廷で迫る。アントーニオの親友バッサーニオの恋人ポーシャが、法学博士に変装して公爵名代の裁判官よろしく、法にもとづきシャイロックの権利は認めつつ、一ポンドを超える肉を切り取るのも一滴の血を流すのも許されない、と裁定。……シェイクスピアの戯曲『ヴェニスの商人』の有名な情景だ。芝居の観客は胸なでおろし、快哉を叫ぶ（裁判それ自体の吟味については、小室金之助『法律家シェイクスピア』、新潮社（新潮選書）、一九八九年）。

欧米における「ユダヤ人」イメージをこの作品から学んだ日本人はおおい。そこには、血の中傷（ユダヤ人がキリスト教徒〔少年〕の血を使って秘密の儀式をすると噂をたてる）／ユダヤ教の過越しの祭（犠牲として屠られた子羊〔一歳オス〕の血を戸口に塗る）／アニス・ディ（神の仔羊としてのキリスト。その聖体と聖血にあずかるミサで歌われる曲）／などのイメージさえ隠されて

いる。だが、私たちは現在、欧米中心主義の「自己破産」のシナリオを、ここから寓話的に読みとることができるのでないか。

シェイクスピアが与えた結末は、つぎのようなもの。//^{かしひし}貸主なのに敗訴したシャイロック。彼に対し、まずは、賠償として全財産をアントニオとヴェネチア国庫とに二分して払わせる、／^{いのち}命は公爵が預かり、／という判決。ところが、キリスト教の「愛」は、公爵による助命とアントニオによる支払い免除の申し出とを結果するだけでなく、かわりに課せられる条件、すなわちシャイロックは〔キリスト教徒と駆け落ちしてしまった〕娘ジェシカに全財産を遺贈すること、／みずからキリスト教に改宗すること、／を実現するのだ。

イスラームとヴェネチア

この虫のよき。欧米中心主義の末路は、これではおさまらない。

これまでに、物語の一つの解釈が関心を集めたことがあった（岩井克人〔一九四七年生まれ〕『ヴェニスの商人の資本論』、筑摩書房、一九八五年）。岩井克人は、①キリスト教社会と②その内部にありながら「外部」として機能する（貨幣とモノの等価関係に支配され、かつ利子生みを許す）ユダヤ人社会という二つの「共同体」のあいだの相互依存関係を考え、①における「慈悲」の精神と、②における「司法」の論理とが、原理的に対立しあう経過と帰結とを物語のなかで眺めようとした。アントニオはシャイロックの論理に敗け、ポーシャはシャイロックの論理を借りて突き詰めたおかげで勝つことができた。他方、シャイロックはキリスト教社会に呑み込まれるかわり、相手を自分の論理のもとで変貌させることになる。二つの共同体は、ともに勝ち・ともに敗ることによって、おののの自己完結性はそれぞれ解体していく、と岩井は見た。そして、そこからヴェネチアをヴェネチアとして成り立たせていたもの、つまり差異を媒介することによって差異を解消する「永久運動」、の視点から、「資本主義」の理解を思いきって拡張しようとしたのである。

私たちは、いま、軽蔑と復讐心とがぶつかりあう「二つの共同体」という二項対立を超える視野で、物語の「決着のつき方」や観客の心理的「解決の仕方」に対して新しい批評の視点をひらき、岩井の到達点＝出発点からの飛翔を果たすべきではないだろうか。シェイクスピアにとって、ヴェネチアにとって、「ユダヤ人社会」にとって、イスラーム世界は切り離しがたく連結したものだったのだし、「資本主義」を透視するには、私のいう「スーパー・モダニティー」と「ネットワーキング」の観点が欠かせないはずだからだ。

「利子なき経済」など眼中になかった日本のエコノミストたちが、ある日とつじよ「イスラーム金融」とのつき合いに遅れをとったと気づき、目の色を変えて走りだした「変わり身」も、「欧米を見ならえ」の「中心主義」のあと追いの姿^{すがた}でしかないのを見るのは、なんとも残念でならない（新しい思考回路をひらくために、櫻井秀子『イスラーム金融—贈与と交換、その共存のシステムを解く』、新評論、二〇〇八年）。（完）